

特集 朝鮮女性史研究会・沖縄スタディ・ツアー報告



2018年3月17日から3月20日、朝鮮女性史研究会は、総勢8人で沖縄スタディ・ツアーを行った。主な目的は①3月17日に開催の「第11回強制動員真相究明全国研究集会・沖縄」(主催:強制動員真相究明ネットワーク/沖縄恨(ハン)之碑の会と18日の沖縄戦の最後の激戦地になった南部戦跡を巡るフィールドワークの参加、②3月18夜、金スプ・ヒョノク夫妻との懇談会、③3月19日の沖縄の軍「慰安所」フィールドワークである。すでに3月の沖縄は暑く、密度の濃いスケジュールで“学び”と“出合い”の旅だった。

第11回強制動員真相究明全国研究集会・沖縄(3月17日)

沖縄大学での全国集会は、150人が参加。冒頭の安里英子さんの主催者挨拶で「強制動員真相究明ネットワークと共同で朝鮮人強制連行問題についての集会が沖縄で開催できたことは画期的なこと」と述べた。朝鮮人が沖縄戦などに動員され、強制労働させられたり、「慰安婦」にされたりした過酷な実態を県内外の研究者、市民運動の活動家たち8人が報告。

事前に主催者に昨年高麗博物館の「企画展『朝鮮料理店・産業「慰安所」と朝鮮の女性たち〜埋もれた記憶に光りを〜』を開催して」を報告したいとお願いし、地域からの報告のひとつとして、企画展準備ではいろいろな方にお世話になり、そのお礼と報告をした。図録15冊も即時完売。



次に、基調講演の沖縄国際大学の石原昌家さんの「天皇制を守る戦闘だった沖縄戦」では沖縄戦が「軍官民共生共死」の方針の下で住民の戦場動員がなされ、多くの住民が虐殺されたことを強調。塚崎昌之さんの「朝鮮人軍人・軍属の動員の実態とその被害」の報告は朝鮮人の志願兵・徴兵の実態を示し、その動員数は37万人以上であり、被害者数が過少に示されている実態を示す。死者の未通知、南方での戦死・餓死、軍での奴隷的扱いなどの例を示し、政府が史料の公開をするべきと強調。この基調講演では沖縄戦が住民を犠牲にあくまでも天皇を守るための戦争であったことと、強制的に連れてこられた朝鮮人の被害にすごく痛みを感じた。

沖縄から3人の報告があり、沖本富貴子さん(『沖縄恨(ハン)之碑の会』)は「沖縄戦で軍人軍属に動員された朝鮮の若者」について、朝鮮人が数多く在籍した特設水上隊などの動員状態を説明し、今だ解決していない課題を示した。高里鈴代さんの「なぜ沖縄にこれほどの「慰安所」ができたのか?」につ

いて、沖縄の 145 ヲ所に慰安所ができた理由を軍による性の統制があり、慰安所が軍の後方施設とされ、沖縄への 11 万人の部隊の移動に伴い、軍が慰安所を開設させ、監視したこと、慰安所が民家を接收し開設されたことなどを語り、「慰安婦」にさせられた女性たちに対する国の責任を強調した。

以上、印象に残ったことを中心に書いたが、はじめての沖縄の旅からたくさんの戦争の悲劇の事実を学び、避けてはならぬ課題を担わされたと今感じている。

南部地区フィールドワーク(3 月 18 日)

沖縄の暑さに負けじと、私たちは沖縄本島の南部での沖縄戦の朝鮮人動員の実態を学ぶフィールドワークに参加した。



最初は旧喜屋武村の山城（やまぐすく）地区を歩いた。ここは朝鮮人が動員された特設水上勤務第 102・104 中隊が壊滅した地区である。山城の構築壕口まで行き、具志堅隆松さんが軍用スコープ、ナタ、髭剃り、箸入れ、兵士のボタン、砲弾の破片など当時の遺品を示し、遺骨を収集した経過を話した。洞窟の入り口はとても狭かったがここでは戦車の攻撃を受け、102 中隊が壊滅した。

続いては、山城の東方の旧摩文仁村米須（こめす）地区に移動。米須のアガリンガマ

は住民が日本軍とともに全滅した（日本軍は住民の脱出を許さずに戦闘）ここには追悼碑があり、ガマはあと 2 ヲ所とも激戦地で住民の半数以上が死亡した（そのうち一家全滅が 62 世帯）。米須には「魂魄の塔」があり、死亡した人たちはそのままになっていたが、戦後塔が建てられた（朝鮮人軍人軍属も）。

フィールドワークの最後は、沖縄戦の追悼碑で平和の礎を訪ねた。平和の礎が波状に広がっているが、左方に朝鮮人名が刻まれた一角があり、2017 年末現在、朝鮮人の死亡者は 462 人分が刻まれている。しかし、日本政府は朝鮮人動員者について、きちんとした死亡認定も行わないままではいるのは大きな問題である。

平和の礎



(渡辺泰子 記)



米須地区の慰霊碑

米須地区の祠、一家全滅となり祠だけが残る。

〇コース

名城—喜屋武→山城地区→魂魄の塔→米須地区→サータアンダギ—→昼食—大度海岸→ガマとイノー→平和記念公園・韓国人慰霊の塔・平和の礎

沖縄戦跡めぐり調査

強制動員の日韓研究者ら

強制動員真相究明ネットワークと沖縄假（ハシ）之碑の会が主催した「第11回強制動員真相究明全国研究集会・沖縄」の参加者は18日、沖縄戦で最後の激戦地となった南部戦線のフィールドワークを行いました。日韓の研究者をはじめ県内外から61人が参加しました。沖縄戦遺骨収集ポランティア「ガマファ」の具志堅隆松さんが糸満市山城地区の山麓にある旧日本軍陣地壕（ごう）を案内し、特設水上勤務隊として動員された朝鮮人の若者が戦闘に駆り出されて全滅した悲惨な歴史を学びました。

韓国・高麗大学で強制動員について研究している大学院生の姜泌求（カン・ピルグ）さん（33）は「壕の周囲に散らばった砲弾の破片や遺品を見て、沖縄戦の恐ろしさを生々しく感じた。強制的に動員された同じ民族の人々の悲惨な体験を想像することができた」と語りました。

二つのガマ（自然壕）で住民230人が焼き尽くされて犠牲になった同市米須地区の集落では、写真家の大城弘明さんが「一家全滅で土地だけが残された場所もある」と説いた。沖縄戦で犠牲になった約3万5千人の軍人・民間人が、国籍の区別なくまつられてい

旧日本軍陣地壕について具志堅さん（右端）の説明を聞く参加者18日、沖縄県糸満市



る「魂魄（こんぱく）の塔」と平和祈念公園の韓国人慰霊塔、462人の朝鮮人犠牲者の名が刻まれた平和の礎（いしじ）を訪れ、静かに祈りを捧げました。東京都府中市から参加した佐藤悠子さん（25）は「強制連行など加害の歴史は、知ろうとしなければ学べない現実がある。戦争を美化する政治の逆流がある中で、史実を解き明かす取り組みは大事だと思った」と振り返りました。

赤旗記事 2018.3.19
佐藤悠子さんのインタビュー掲載

沖縄に生きて、活動して

—元朝鮮総連沖縄県本部委員長の金洙燮(スソプ)・金賢玉(ヒョノク)ご夫妻を訪ねて—(3月18日)

朝鮮女性史研究会は3月18日、ペ・ポンギさんを最後までお世話した沖縄の元朝鮮総連委員長である



金洙燮・金賢玉夫妻を囲んで記念写真

金ご夫妻にお会いしてお話を伺うことができた。ペ・ポンギさんは、戦前、沖縄で日本軍の「従軍慰安婦」にされ、その後、さまざまな事情から「慰安婦」であることをカミングアウトされたハルモニである。

金ご夫妻は、それぞれ山口と神戸で同胞たちのための活動をしていたが、1972年の沖縄の日本「復帰」にともない、総連沖縄本部の活動を始めるべく赴任して行った方たちだ。夫妻に

とって沖縄はまったくの未知の地であり、活動を始めようにも手探りの状態からの出発だったそうだ。そのため最初は朝鮮名を名乗らず、日本名で活動を始めたという。しかし「一つも信用してもらえなかった」と金さん。「これではだめだ」と、米屋、本屋、酒屋とどこでも朝鮮名を名乗っていくと、「よくきてくれた」といたるところで人々が歓迎してくれた。「沖縄も朝鮮も日本の植民地なんだ」との思いが一致したのだろう、と金さんは言う。

ペ・ポンギさんと知り合ったのは75年。なかなか頑な態度を崩さないペさんだったが、ご夫妻の自然体での暖かな人柄に触れ、徐々に心を開いて行ったそうだ。晩年は総連事務所の近くに住み、機関誌の送付や細かな仕事を手伝うまでになり、「故郷の人はいいね」という言葉がペさんの口から聞けるようになったという。人間不信に陥っていたと言っても不思議ではないペさんから、「いいね」という言葉が出るに至るまでには、夫妻のペさんはじめ同胞への愛情と、ペさんの夫妻への信頼とがあってこそ生まれたものだろう。

沖縄でご夫妻が金城実さんや知花昌一さんらに囲まれてにこやかに歌っている姿を拝見し、ああ、お二人は沖縄で確固とした地盤を作られたな、沖縄の人々に愛されているな、と深く深く感じさせられた。沖縄で平和と同胞たちのために、青春をかけ、人生をかけてこられたご夫妻の姿は、穏やかな中に凛とした美しさを感じさせるものだった。

【なお、お二人の話をまとめるつもりでしたが、記録のミスでこの程度のものしか書けませんでした。お二人のお話はまたの機会にまとめることとしたいと思います】

(梁裕河 記)

沖縄の軍「慰安所」フィールドワーク(3月19日)

26年ぶりの沖縄

3月に「第11回強制動員真相究明全国研究集会・沖縄」に参加してきた。前回沖縄に行ったのは1992年なので、26年ぶりということになる。久しぶりの沖縄は気温25度。東京との気温差20度近くで、まるで別世界だった。

26 年前に沖縄に行ったのは「全国女性史研究のつどい」に参加するためだった。「全国女性史研究のつどい」が開催された当時、日本では日本軍「慰安婦」が社会問題となっていた。そのこともあってこの時の集会では沖縄の日本軍「慰安所」の報告が注目を集めた。その報告によると、戦時中、沖縄には 120 カ所ほどの「慰安所」があるということだった。集会参加者はその数の多さに一様に驚いた。

26 年前、日本軍「慰安所」の実態はまだ調査の段階で、わかっていたのは「慰安所」は日本が占領したアジア各地にあり、日本国内ではまだ実数がつかめていなかった。その中で、沖縄には 120 余カ所もあったというのは驚きだった。

軍「慰安所」フィールドワーク

今回の沖縄行きの 3 日目、古賀徳子さん（「日本軍慰安所」（『沖縄県史 各論編 6 沖縄戦』）執筆者）の案内で軍「慰安所」フィールドワークを行った。まず、1853 年ペリー提督上陸之地記念碑がある泊外人墓地を見学。この記念碑がある墓地の向かい側には「台ノ瀬避（隔離）病院」だった場所があった。当時



時この病棟に 30 人の朝鮮人「慰安婦」が住み、「慰安所」には泊国民学校に駐屯していた球部隊の兵隊たちが出入りしていた。泊北岸にはテントで囲んだ粗末な「慰安所」があったという。

次に今回沖縄に行った目的の 1 つである裴奉奇さんが晩年すごした場所を車で通過し、辻遊廓開祖の墓に回った。「辻」



とは沖縄の遊郭のことで、沖縄の公娼地帯を指す。この「辻」の女性たちは戦時中、軍の「慰安婦」として徴集されている。

午後には南風原に行き、照屋、津嘉山、山川の慰安所跡を巡った。南風原町村史には、多くの住民が「慰安所」や朝鮮人「慰安婦」について証言している。その後、南城市糸数の糸数アブラチガマに入ってガマの体験をした。このガマには朝鮮人「慰安婦」、沖縄の「慰安婦」がいたという。

沖縄の「慰安所」の特徴は一般市民の居住地に点在し、多くの住民が「慰安所」の存在を知っていたということだ。大人も子どもも「慰安所」の前に長い列を作って待っている兵士の姿を目撃している。その「慰安所」で働かされた朝鮮人女性たちも目撃されている。

沖縄の産業「慰安所」

数多くあった「慰安所」のほとんどは軍「慰安所」だったが、そのなかで産業「慰安所」と思われたのが沖縄北部東村の「慰安所」だ。1942 年頃、沖縄に本土から建築資材が入らなくなり、東村川田のエーラ山から建築資材を搬入することになった。そこに製材所開設のための馬道を拓く道路工事が行われた。この製材所は民間経営だった。1944 年には武部隊が地下防空壕構築のための資材と木炭を得るための木材伐採を行い、武部隊兵士と徴用入夫 200 人が伐採作業と製材所搬出にあたった。その際につくったのが東村の「慰安所」だった。ここには球部隊兵士 200 人、水勤隊兵士 150 人と朝鮮人男子 130 人も宿泊し、朝鮮人「慰安婦」20 人を引き連れていた。この朝鮮人女性たちは 20～30 歳以下だったという。

1945 年 3 月には製材所は爆撃され閉鎖された。エーラ山に設置された「慰安所」は日本兵だけでなく

朝鮮人軍夫も沖縄人人夫も利用可能だったという。

産業「慰安所」か軍「慰安所」か

この東村の「慰安所」は産業「慰安所」といえるかあるいは軍「慰安所」なのか。当時、一般市民も戦闘に動員させられた沖縄の状況では、兵士か住民か区別するのは困難といえる。軍のために製材所を作り木材を伐採するのは戦闘行為ではなく軍経営の産業とも考えられる。日々戦闘が繰り返される沖縄でそれらを区別することにそれほどの意味がないようにも思える。軍であれ産業であれ朝鮮人女性たちが「慰安婦」にさせられたということは紛れもない事実なのだから。

(大場小夜子 記)

米軍新基地建設中の辺野古を訪ねて(3月20日)



「第11回-強制動員真相究明全国研究集会・沖縄」終了後の3月19日、現地の人の案内で、辺野古の米海兵隊キャンプ・シュワブ前に行きました。27日から29日にかけて、天皇・皇后夫妻沖縄訪問に備え、工事は一時中断と

報じられていたため、ゲート前は警備要員も少なく、基地建設反対の人たちの座り込み行動も一時中断されていました。

埋め立てが行われている辺野古の海が、見えるところに案内していただきました。目の前にはサンゴ礁の広がる青い海が広がっていました。

「ここ辺野古・大浦湾は、独特の生態系をもち、サンゴ礁、ウミガメ、絶滅危惧種のジュゴンなどが生息しているところです。ヘリ基地建設のために失われた自然は取り返しがつきません。また、ヘリ基地建設が予定されている海底には辺野古断層、楚久断層の二つの危険な断層があります」とのヘリ基地反対の人の話でした。



護岸工事が強行されている所は、その美しい海を分断しつつありました。新基地が完成すると、この静かな美しい海がなくなり、危険と隣り合わせの生活になると言われた言葉が心にずしりと響きました。

私は東京にある米軍横田基地の近くに住んでいます。上空を飛行機が飛んでいく時はテレビの音もかき消される騒音です。また、オスプレイも飛ぶことがあり不安です。4月10日には、降下訓練中の米兵が切り離したパラシュートの一部が、すぐ近くの中学校に落



下する事故がありました。幸いけが人はいませんでしたが。

(小川チヅ子 記)

3 回目を迎えたトラヂの会の野草摘み&母子草の訂正

永津 悦子（朝鮮女性史研究会）

2015 年、16 年、そして今年 18 年 3 月 28 日、野草摘みは 3 回目を迎えました。今年も湘南国際村の麓に位置する私の母の元棚田で行いました。今年は 9 人乗りのワゴン車 2 台で、1 回目の 2 倍の参加者でした。それは皆さん年々足腰が弱まり、車椅子などに乗る方が増え、ボランティアの方々のお世話も必要とするようになったからでした。摘んだ野草では、ノビル・タンポポ・スカンポ・フキ・カンゾウ・ミツバ・セリ・ヨモギがこれまでと同様でしたが、今年は新たにニラを見つけた方がいらっしゃいました。タケノコは若いボランティアの方々が中心になって竹藪に移動し、まだ土の上に頭が全く見えない状態の物やわずかに出たのを探り当て、参加者の人数分掘りました。



ブルーシートを囲んで昼食。椅子や車いすの方が増えました。

ボランティアの方々以外にも今年初めて参加した方もいらっしゃいました。2014 年の企画展のために聞き取りをさせていただいた崔命蘭さんも初めての参加です。聞き取り時は 87 歳、今年 4 月でもう 91 歳になりました。ヨモギで作る草餅より母子草で作った草餅の方がとてもおいしいと伺ってから、私は母子草探しをして、見つけた草を母子草として 2015 年の会誌に写真付きで紹介しました。ところが、母子草は黄色い花をつける筈なのに、その草をずっと観察していても黄色い花が見られず、おかしいと思い続けていたところ、その 1 年後に黄色い花をつけた本当の母子草がいくつか生えてきたのでした。そこで、ここにその写真を載せて訂正させていただきます。大変失礼しました。



椅子に腰かける崔命蘭さん



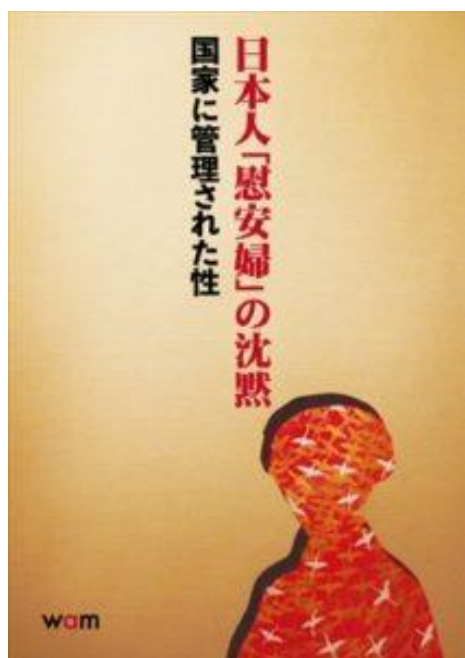
ボランティアの方と野草摘みをする命蘭さん



これが本当の母子草

2017 年企画展「朝鮮料理店と産業「慰安所」と朝鮮の女性たち」でたいへんお世話になりました wam の第 15 回特別展「日本人「慰安婦」の沈黙～国家に管理された性」が好評につき、**展示期間が 2018 年 11 月 25 日まで延長**されましたのでまだご覧にならない方はぜひおいでください。

今回、特別展のカタログが発行されましたのでご紹介します。日本人にも「慰安婦」にされた女性たちがいたことはわかっていました。アジアの女性たちと同じに、公文書や元日本兵の手記に記録されています。しかし、多くの女性たちは沈黙を守り続けてきました。今も続く性暴力やセクハラなどの状況をなくするためにもひとりでも多くの方に展示を見ていただき、カタログも購入してください。



グラビア[地図]記録さ 目次 「慰安婦」

- 1 性を管理する国家・ロヤン国～近代公娼制度から戦後まで
- 2 被害を語った日本人「慰安婦」
- 3 敗戦後の性暴力被害

アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」編
 定価：1,944 円 頁数：フルカラー 54 頁
 発行：2018 年 5 月

カタログ購入先・お問い合わせ先

〒169-0051
 東京都新宿区西早稲田 2-3-18
 AVACO ビル 2F
 アクティブ・ミュージアム (wam)
 女たちの戦争と平和資料館
 Tel: (03) 3202 4633
 Fax: (03) 3202 4634
 E-mail: wam@wam-peace.org

編集後記

◇はじめて沖縄の旅は年柄もなくあらためて“戦争とは何か”を熱く考えてしまった。これからも沖縄も視野に入れた研究会を進めていきたい。しかし、暑かった。(WY)

◇3 月の沖縄は、暑かった。73 年前、この月にアメリカ軍が沖縄に上陸したのだ。その時は、こんなに暑かったのだろうか。遺骨収集活動をしている具志堅さんの案内で行ったガマの前には、飯盒らしきものがあった。戦争中に使ったもののようだ。未だに、戦争の跡が残っている沖縄。沖縄では戦争はまだ終わっていないということを肝に銘じる旅だった。(SO)

朝鮮女性史研究会に 参加しませんか♡

月 1 回の研究会、年 3 回会誌発行、フィールドワーク、講座などの活動を行っています。テーマはいろいろですが戦前・戦後の朝鮮や在日韓国・朝鮮人の歴史に取り組んで 2 回の企画展を開催しました。(高麗博物館HPをご覧ください)

硬派の研究会のようですが、決して難しくはないのでぜひ一緒に学びませんか！

○連絡先：大場小夜子(高麗博物館)

渡辺泰子 yasuko12@wmail.plala.or.jp